

イエール大学図書館所蔵朝河貫一文書 (朝河ペーパーズ)の基礎的研究

佐藤雄基

序

朝河貫一は一八七三年二月二〇日に福島県二本松に生まれ、一九五年単身アメリカ合衆国に留学し、同国において生涯にわたって日本中世史・比較法制史家(イエール大学名誉教授)、国際関係(日米関係)論者、日本文化紹介者として活躍し、一九四八年八月一日に同国において死去した。英語圏における日本史研究の第一人者であり、主著とされる『The documents of Iriki』(『入来文書』)は、マルク・ブロックら同時代の西欧の歴史家たちの日本史理解に大きな影響を与えたといわれている。その反面、生前その存在は必ずしも日本では知られていなかった。一九四八年の死の後、第二次世界大戦後の日本においても、アメリカで活躍した「国際人」朝河貫一への関心が高まり、歴史学を超えた広がりをもつに至る。

朝河関係の書籍・研究は数多い。主著『The documents of Iriki』に

原史料の翻刻を付した朝河貫一著書刊行委員会編『入来文書』(日本学術振興会、一九五五年)、同委員会編の遺稿集『Land and society in medieval Japan』(日本学術振興会、一九六五年、奥付タイトル『莊園研究』、以下同)、朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』(早稲田大学出版部、一九九〇年、以下『書簡集』)が刊行されている。研究としては、阿部善雄氏による評伝『最後の「日本人」朝河貫一の生涯』(岩波書店、一九八三年、岩波現代文庫として二〇〇四年再版)の他、朝河の出身である福島県や早稲田大学の関係者を中心とした朝河の顕彰運動及び「朝河貫一研究会」の活動が継続しており、近年では矢吹晋氏による『入来文書』などの邦訳が完成した⁽¹⁾。

こうした朝河研究の特徴は、『入来文書』『莊園研究』の編集などを除いて、専門の日本史家以外のものである。主に「国際人」という側面に注目した伝記的研究が盛んなことである。一方、戦後の日本史学では、必ずしも積極的に引用されることはなかったように思われる。だが、最晩年の網野善彦が関心を抱いていたように、莊園制と職、封建

制をめぐる朝河の議論は牧健二・清水三男に影響を与えており、『入

来文書』の刊行された一九二九年中には牧健二によって同書の初の本格的書評が公表されたことにみられるように、朝河の比較封建制論は、日本の近代歴史学の歩みと切り離された場において構築されたものではない。朝河の再評価を通じて、封建制論をめぐる日本の史学史を新しい角度から振り返ることが可能になるのではないだろうか。⁽⁴⁾

朝河の比較封建制論を再評価する際の重要な材料が、朝河の勤務校であるイェール大学スターリング図書館のマニスクリプト&アーカイブズ部に所蔵されている朝河貫一の旧蔵文書 (Asakawa Papers 以下「朝河ペーパーズ」) である。「朝河ペーパーズ」は従来も存在は知られており、最近では増井由紀美氏がこれを利用した伝記的研究を進めているが、資料群の全体像を紹介したものではなかった。⁽⁵⁾

すでにマニスクリプト&アーカイブズ部によって基礎的な整理は行われており、その概要 (一九八四年六月作成。以下「概要」) は同図書館HPのDB上において公開されている。⁽⁷⁾ だが、「概要」に記載された情報では内容を推測することが困難である。資料調査が容易ではない海外資料であるだけに、内容にまで踏み込んだ目録・資料紹介を行い、日本側の研究者の利用の便に供することにも意味があるように思われる。そこで本稿では、二〇〇八年三月・九月に行った調査の結果を踏まえて第一章では「朝河ペーパーズ」の概要・資料紹介を行い、その上で第二章ではこの資料を活用することによる朝河研究の新たな方向性について論ずる。また末尾に新たに作成した「朝河ペーパーズ」の【目録】を付している。

第一章 「朝河ペーパーズ」の研究

第一節 「朝河ペーパーズ」の成立と現状

「概要」には「朝河ペーパーズ」の来歴がまとめられている。これによれば、現在の「朝河ペーパーズ」は、一九四八年の朝河の死後から一九五五年までに形成された朝河旧蔵の書籍・草稿・カード類を中心とするシリーズⅠⅡⅢ計六〇ボックスを本体として、一九八四年に Mary Rouse、同年に阿部善雄、一九九〇年に Jerome Pollitt の寄贈、二〇〇〇・一年及び二〇〇四年に同大学の東アジア図書館のキュレーター (館長) ・コレクシヨンの移転を受けて形成されている。

「朝河ペーパーズ」は、ボックス (Box) とフォルダ (Folder、縦 24・5 cm 横 30・0 cm) によって整理されている。ノートや書籍の形状のものはボックスに入れて、草稿やルーズリーフなどは一点々数点ずつフォルダに挟まるかたちで整理されており、ボックスごとに数冊のフォルダないし書籍・ノートが収められている (以下、ボックス・フォルダ番号をボックス：、フォルダ：と表記)。各ボックスの側面や各フォルダの前面右上隅には、収録資料に関する見出し (フォルダ名) が付されているが、極めて簡単なものである。「概要」にはボックスの見出しは記しているが、フォルダの見出しについては数フォルダをまとめて独自に簡単な見出しを記すにとどまる。また、ボックス 111~36 では、一回り小さなボックスを用いて、バラのカード (縦 10・0 cm 横 15・1 cm) が整理されている。

二〇〇八年九月時点までの資料の公開状況としては、六〇ボックス

のうち一四ボックス（ボックス1〜10、51、52、56、57）がマイクロフィルム化（10リール、9715フレーム）・公開されており（請求番号HM201）、日本からでもコピーの注文は可能である⁽⁸⁾。また、マイクロ化されていない資料については、マニユスクリプト&アーカイブズ部における閲覧が可能である。

「朝河ペーパーズ」計六〇ボックスは、「概要」ではボックス1〜4がシリーズI（書簡）、ボックス5・6がシリーズII（日記）、ボックス7〜60がシリーズIII（原稿・ノート・雑録）として三分類されているが、ボックスの配列の順番に従いながら、内容を見ていくと、一五のグループに分類できる。以下、一五グループを順にみていく（本稿末尾の【目録】も参照）。

第二節 「朝河ペーパーズ」の内容

(一) 書簡

ボックス1〜4（フォルダ1〜43）には一八九五年の渡米以後の受信書簡、ボックス7（フォルダ57〜66）には主に発信書簡の控えなどが収められている。英文とともに日本語文も多く含まれるが、一九二〇年代半ばから日本文の書簡が少なくなる。また、ボックス5・6（フォルダ45〜56）の「日記」には発信書簡の控えが書き記されている。

朝河貫一を受発信書簡は主にイエール大学図書館と福島県立図書館に所蔵されている。福島県立図書館分に関しては、同館所蔵の自筆メモや論文抜粋、主として生前に発行された資料などと朝河貫一を受発信書簡とに關する『朝河貫一書簡目録』が作成されており、研究者の便に供されている。一方、イエール大学図書館所蔵分書簡については、

簡単な目録でさえも作成されていないのが現状である。

一九九〇年に早稲田大学出版部から『朝河貫一書簡集』が刊行され、朝河の受信書簡が翻刻・邦訳されているが、『書簡集』編纂の際の調査によれば、当時確認された朝河受信書簡の残存点数は二二六六点であり、そのうち同書には三二七十三点が収録されているのに過ぎない⁽⁹⁾。『書簡集』編集委員会の方針としては「朝河発信書簡の内日本文のものは一定の方針によって取捨選択せず、年月日不明、宛先不明のものなどを省き、内容が一身上の個人的事情に亘るものも努めて網羅」したが、英文の発信書簡については編集委員会が取捨選択を行っており、その基準は必ずしも明確ではない⁽¹⁰⁾。受信書簡については、A・V・モリス夫妻、C・シーモア、G・B・サンソム、A・E・モーガン、L・ウォーナーの五人の文通相手からの受信書簡を「参考資料として引証」するに留まっている。

ボックス1〜4には、家族や日本の友人との往復書簡の他に、朝河宛のマルク・ブロック書簡など、朝河と西欧の歴史学者との交流を知る重要な史料が含まれているが、『書簡集』には収められておらず、今後の紹介が望まれる。朝河の書簡には自己の研究の他に、教育、文学・言語、戦間期・第二次世界大戦期の日系人（Japanese-Americans）の状況などに関する言及がある。それらの研究の前提条件として、全ての翻刻・邦訳は難しいとしても、受発信者、日付、内容などに関する網羅的な目録を作成・公開することが急務である。

(二) 日記・日記目録

ボックス5・6（フォルダ45〜56）には朝河貫一の日記が含まれる。一九〇〇年から一九四八年までの期間にわたる主に英文の日記

(おおよそA5サイズの大学ノート)であり、自らの書簡の草稿・写、受信書簡の写、訪問場所・人名などが記され(日本語表記もまま見られる)、新聞の切り抜きや写真などが挿入されている箇所も多い。但し、一九四〇年七・八月の入院の記録を除いて一九二五年一〇月から一九四五年一月までの二〇年間の日記は存在しない。そのため一九三〇年代の朝河の動向が分かりにくいものになっている。

また、ボックス7(フォルダ67)には“appointment book”というフォルダ名の付された「日記目録」(朝河自身の付した内題)というノートが存在する。「日記目録」には一九一一年五月一日から二五年十月一日まで、日付ごとに面会した人物の名前が記録されている(但し網羅的に記録されている訳ではない)。日記と参照しながら朝河の交友関係を探る上での基礎資料となろう。例えば、一九一七年〜一九年の二度目の帰国の時期を中心とする日本の歴史家との交流や、同じ会津出身である野口英世をはじめとする在米の日本人との交流が特徴的である。

(三) 出版物

ボックス7(フォルダ68・69)には朝河自身の著述を含む出版物が収められている。フォルダ69の“Why and How Japanese History May Be Studied With Profit in America”(何故、そして如何にしてアメリカにおける利を得て日本の歴史を学ぶのか)は一九〇八年に“Washington Historical Quarterly”の二号に収録された論考であるが、未紹介の著述である。この他の出版物については【目録】参照。

(四) ノート・原稿草稿

ボックス7〜10(フォルダ71〜109)には朝河のノート・原稿草稿が収められている。以下、代表的なものを紹介する(詳細は【目録】参照)。

既発表論文の草稿としては、フォルダ71〜3に、『アナル』などにおいて朝河が発表した書評の草稿、フォルダ98に一九一六年の“The Life of A Monastic sho in Medieval Japan”(中世日本における寺領荘園の生活)、フォルダ99に一九一四年の“The Origin of Fudal Land Tenure in Japan”(日本における封建的土地保有の起源)などが見えるが、注目されるのは未発表の草稿である。特にボックス10に収められている“Nature of Fudal Society”(封建社会の性質)というフォルダ名を付された一四種類の草稿群は興味深い。この内、一九三二年九月の日付のフォルダ106の草稿が『荘園研究』に収録されているが、これが選択された理由は不明である。作成時期の明記された草稿としては、他にフォルダ107に“Oct 10, 1936”、フォルダ104に“Nov 10, 1936 作成 Jan 27, 1937 改稿”と記された草稿がある。これらの草稿の作成年代は一九三六・七年に下り、内容的にも従来紹介されていた一九三二年の草稿よりも詳細で分量も多い。今後の研究が不可欠である。

フォルダ80には一九三五年二月六日付でジョージ・サンソム(Sir George B. Sansom)に送られた“Allotment of rice-land”(班田収授)と題された朝河のレポート(タイプ打ち二六枚)が見える。末尾には班田収授について朝河に問い合わせる同年一月二六日付のサンソム書簡が付されている。⁽¹¹⁾朝河のレポートはこれに答えたものである。

フォルダ91の“The Japanese in Siam in the early 17th century”

(一七世紀初頭のシヤムにおける日本人)は、山田長政を紹介する文章である。

フォルダ92には朝河がダートマス大学に一九〇九年二月に提出した“A Preliminary Study of Japanese Feudalism”(日本封建制の予備的研究)と題された卒業論文がみえる。大化改新から明治維新までの日本封建制史が論じられている。日本の近代化の歴史的前提として日本史上の「封建制」の存在に注目するという朝河の学問的関心が、留学直後からあったことが伺えて興味深い。

(五) ゲストブック

ボックス10(フォルダ110)にはゲストブック二冊が収められている。一九〇八年九月〜一九一一年六月十四日と一九三〇年七月、一九三二年十月、一九三五年八月のものである。

(六) ボックスに整理されたカード

第一節で述べたように、ボックス10からボックス36までは、木製の小ボックスに詰められたカードから成る。ボックス中のカード群ごとに右上にインデックスが付され、カードごとに右上隅にテーマ名、年号などが記されるなど、几帳面に整理されている。膨大な量に及ぶために個別の調査はまだ充分に及んでいないが、ボックスの内容は大まかには西欧史関係(ボックス10〜13)、フランス史関係(ボックス14〜24)、日本史関係(ボックス25〜36)に分かれている(末尾の【目録】参照)。

一例として、日本史関係では目録上“Simazu”と題されたボックス31〜34をみると、「鳥津」関係のカードが集められている。ボッ

クス31のカード群ごとのインデックスをみると、冒頭のインデックスが欠けているものの(内容的には南九州の地理関係)、「大化 及 庄紀源」「鳥津庄 起」「1026-1185 庄ノ成長」「忠文 1188」とあり、以下ボックス34の「1869」まで編年でカードが整理されている。内容的には、一年ごとの事件・史料のメモであり、鳥津荘・鳥津氏中心である『入来文書』の草稿らしきタイプ打ち原稿なども切り貼りされている。ボックス31〜34所収カードの構成は、南九州の地政学的位置に始まって大化の改新、荘園の形成、そして鳥津荘・鳥津氏の発展から一八六九年の版籍奉還に至るまでの南九州の歴史に関するものであり、第二章で後述するように『入来文書』や朝河の未完の著『南九州の封建体制』の構想に密接に関連するものであると想定される。

(七) “Japan Chronicle”(日本年代記)

ボックス38〜45(フォルダ118〜187)には、“Japan Chronicle”(日本年代記)というフォルダ名の付されたルーズリーフ群が収められている。「朝河ペーパーズ」にみえるルーズリーフはほぼ同じものであるが、縦21・5cm横14・0cmの薄手の紙で、フォルダに束で挟まれている。一二二年から一九四五年まで『鳥津国史』などからその年に何が起こったのかを抜き書きした年譜を軸にして、ところどころに封建制など特定テーマに関するメモをはさむ形から成る。これについては第二章において後述したい。

(八) 学生時代のノート、読書ノート、メモ類

フォルダで整理されたルーズリーフやノートである。ボックス46には、東京専門学校・ダートマス大学の学生時代の講義ノートや読書

ノートが含まれている。『古代法』などヘンリー・メインの著作に關する一八九七〜九八年の読書ノート（フォルダ188）などは、朝河の法制史理解の土台を考える上で興味深い。

ボックス47にはフォルダ202に英国史に關するルーズリーフの束、フォルダ205に封建制に關するノート、フォルダ206にゲヴェーレ (Gewere) などに関するメモを含むドイツ史関係のルーズリーフが収められている。フォルダ208〜211にはギリシア史に關するノートが収められている。ボックス48のフォルダ216には一九四〇年の年記の付されたマルク・ブロックの『封建社会』の読書ノートが収められている。『封建社会』刊行が一九三九年なので、朝河は刊行直後にこれを熟読したことになる。ボックス50には中世西欧史に關するメモ（フォルダ231）などが見える。ボックス58のフォルダ294には西洋史に關する事項を編年に記した黒い表紙のノートが一冊挟まっている。フォルダ237にみえるカロリング朝の王の立法に關する論文は朝河の西洋史論文の可能性があり、今後の検討を要する。

(九) 『入来文書』資料・写真

ボックス48（フォルダ212〜5）は『入来文書』執筆の際の材料（但し一部分に過ぎない）や「入来院寺尾武光系譜」写（フォルダ215）等を含む。ボックス52には朝河自身（フォルダ239）や両親、風景（フォルダ240）などの写真が見られる。

ボックス58のフォルダ293には『入来文書』に利用した日本全図・南九州の図含む一六地点の地図、フォルダ295には数十枚の日本各地のお土産用の写真付き葉書が収められている。

(一〇) 書籍

ボックス53〜4は論文の抜き刷りや書籍などからなる。フォルダ242・243の「色葉字類抄」上（大正十五年）は、一九二六年頃、前田利為からイェール大学図書館に寄贈のあった本の一冊と推測される。フォルダ244にはF・A・ハイエク「真の個人主義、偽りの個人主義」（一九四六年）や中田薫「日本庄園の系統」「王朝時代の庄園に關する研究」の抜き刷りも合冊されており、特に前者は多数の書き込みが見られ、ハイエクに対する関心の強さが推測される。フォルダ245には『史苑』十二巻五号（一九三九年）に掲載された朝河の論文「高津忠久の生い立ち」など六地点の論文の抜き刷り、フォルダ246には東京実業社から出版された『日本の禍機』、フォルダ247には蚊田蒼生校訂『古今和歌集』上下、『新古今和歌集』上下（東京書肆白楽圃板）四冊の和綴本が収められている。

(一一) 朝河が指導した学生のレポート・論文

朝河の講義録は残されていないが、ボックス55・56に朝河が指導した学生のレポート類・論文（ほとんどが英文タイプで、論文には稀に朝河の書き込みがある）が数多く含まれていることは興味深い。フォルダ251の一九二六年頃のMargaret Yerrintonの答案にはタイプで "Allot and Fief", "Sanction", "Nobility", "Feudalism in France", "Feudalism in Germany", "Feudalism in France and Germany" と小問毎の題がみえ、ローマの "Possessio" とケルマンの "Gewere" の違いを問う問題も見られる。朝河は一九二三年以降「中世欧州法制史」講座を担当しており、一九二〇年代後半以降に集中する学生のレポート・論文のテーマのほとんどが西洋法制史関係である（フォ

ルダ270など一〇年代の日本関係の論文もあるが)。これらは朝河の周辺にいたアメリカ人学生の顔触れやその関心、あるいは朝河の教育・講義の在り方を探る上での材料となろう。

(一) 翻訳草稿

ボックス57 (フォルダ275、287)には朝河の未公表の翻訳草稿(英文タイプ)がみえる(「目録」)。「日本書紀」をはじめとする日本古代史料から宗教史関係史料を抜粋して英訳を試み、中世日本の宗教社会史上の史料として『住吉物語』などを英訳している。また、十七条憲法、八〇一世紀の日本荘園史料(タイプ打六五枚・七七枚)を翻訳し、後者は遺稿集『莊園研究』に収録されている。さらに広く日本文化に関連して、楠木正成の話、勝海舟と西郷隆盛との江戸開城の挿話、狂言の「附子」、明治天皇の五カ条の御誓文、中世の禅僧の法語の翻訳もある。

このうち宗教社会史関係の翻訳は、一九一五年一月付五十嵐力宛書簡⁽¹⁵⁾において朝河自身が「(一) されども之が副産物として存外ニ多量を得候は、日本の宗教と社会事情及要求との相関係せる点ニ関する発見ニ候。尤之ニつきてハ数年来当大学院にてセミナー相開居り、今年ハ五六名の社会学及史学の学生と共に研究中ニ候。(中略)且つハ学生のためにも原料を毎年少しづつ、英訳して提供し、分析討議の用ニ供し候。昨学年ハ浄土対武士、禪対武術等の材料を少し訳し、今年ハ或ハ浄土の社会的影響を一層訳出するやも知れず。かく毎年相加ふべく候。(以下略)」と言及する「原料」「材料」に対応しており、教材としても用いられていたものであろう。イエール大学において朝河は一九〇七年から一九二一年まで「日本文化史」の講座をもっていた。こ

れらの宗教社会史関係の翻訳草稿群は一九一〇年代に形成されたと考えてよいだろう。なお一九一〇年代に日本でブームとなった「岡田式正坐法」に関する翻訳草稿(フォルダ287)など、他の翻訳草稿についても同じ年代に成立したと推測できるものがある。

(二) 「YAJコレクション」目録

イエール大学バイネツケ貴重書図書館には朝河が関わった二つの日本コレクションが所蔵されている。一つは所謂「日本文書コレクション」である。これは一九〇六、七年にイエール大学・アメリカ議会図書館の双方から依頼を受けて朝河が日本に一時帰国し、収集した日本語図書のうちイエール大学所蔵分⁽¹⁶⁾からなる。

もう一つ、朝河収集の日本資料として日本イエール協会寄贈コレクション(Gifts of the Yale Association of Japan 略して「YAJコレクション」)が同図書館に所蔵されている。これはイエール大学の日本人卒業生が日本で結成した同窓会組織「日本イエール協会」の出資によって、一九三四年に形成・寄贈された日本文化財のコレクションであり、中世文書も含まれる⁽¹⁷⁾。朝河はその一点一点に関して「Gifts of the Yale Association of Japan」と題する詳細な英文目録を作成している(現在バイネツケ同図書館の参考資料コーナーに架蔵)。その目録の草稿がボックス58フォルダ289、292に収められている。同ボックスのフォルダ288には「YAJコレクション」寄贈に関する一九三四年四月三日付の日本イエール協会会長の大久保利武書簡や「浅川貫一様」宛同年六月六日付久門高利書簡など計一二点の関連書簡及び書類が収められている。

(一四) 巻物・冊子類

ボックス59は「概要」では“Scrolls”というボックス名が記されているが、巻物二点と冊子類三点、フォルダ一点が収められている。

この内、「大井文書写」は、戦国大名武田氏家臣の大井家の文書であり、第一紙(縦29・8cm横46・0cm)以下一五紙貼り継ぎの巻物仕立てとなり、一三点の文書と一点の墨跡から成るが、「原藏者朝河貫一、一九一八年に複本作成」という来歴を有する東京大学史料編纂所架蔵の影写本「大井文書」(請求番号3071・36101)と同一のものである。すなわち一九一七～九年の二度目の帰国の際に、朝河が「大井文書写」を収集し、それを史料編纂所に提出して、現在の影写本「大井文書」を作成させたものと推定される。表紙に“Yale University Library 1920”というシール(縦11・0cm横7・6cm)が貼られており、朝河の帰国後一九二〇年にイエール大学図書館に寄贈されたことが分かる。その後、朝河の手に置かれたまま、朝河の死後、朝河文書の中に伝来することになったのだろう。

明治七年以来務めていた小学校校長を退職する朝河正澄に対する「岩代国伊達郡立小山村」村民の感謝状が含まれる(第一紙縦21・0cm横19・5cm、巻物仕立てで以下全紙貼り継ぎ)。「明治三十六年九月下浣」の日付をもつ。正澄の死後、朝河の手に渡ったのだろうか。

「農家年中行事繪巻 狩野玉燕筆」と題する絵巻物がある(縦29・6cm横114・5cm(第一紙)、全七紙)。巻末に「享保癸卯八月日 狩野玉燕筆」(癸卯=享保八年)とあり、玉燕の印が押されている。横浜市歴史博物館所蔵の「四季農耕図絵巻」(狩野玉燕作。文化一一年青亀齋書写)と同じものである。

この他には冊子類として いろは尊経閣「寶積渠」「寶積経要品

解説」、「国華」一六編一八四号が含まれる。フォルダには鉛筆で“maps & diagrams”と題され、内裏図や王朝文化に関する図説の切り抜きなど一九点とメモ一点が残されている。

(一五) イエール大学日本人卒業生同窓会名簿

ボックス60には一八七〇年から主に一九二二年までのイエール大学の日本人会の名簿が含まれている。⁽¹⁸⁾冒頭に墨書で「エール日本人会」「エール大学日本学生名簿」と題され、留学生一人一人について初期には「姓名」「生国又ハ住処」「エール在校年限」「左ノ年限ノ内ニ学ビシ分科」、後には「姓名」「生地又ハ住処 生年月日」「日本ニテ最後ニ在リシ学校 其ノ年限」「米国ニ来リシ年月」「コレマデ学ビシ米国ノ学校 其ノ年限」「エールニ来リシ年 エールニテ学ベル学科」「現在ノ寓処」という項目が立てられている。項目の充実は、日本の学校を卒業してから留学する者が増加したことに対応するのだろうか。書簡・日記と合わせて、第二次世界大戦前の在米日本人留学生の研究におけるこの資料の活用が求められよう。

第二章 「朝河ペーパーズ」を用いた朝河研究の可能性

第一節 『入来文書』後の朝河貫一―今後の調査の課題

従来の朝河研究は、日露戦争時における朝河の個人外交的活躍に注目するか、その後学究生活に入って一九一七～九年の日本留学から一九二九年の『入来文書』完成に至るまでの過程を描くか、どちらかに力点が置かれてきたように思われる。その一方、『入来文書』完成後、

一九三〇・四〇年代の朝河の動向については、前述のように「日記」も残されていないこともあって、実は分らないことが多い。そのために従来は死の直前まで封建制研究に一心に取り組んでいたと漠然と考えられてきたのではないだろうか。

だが、「朝河ペーパーズ」を見る限り、西欧の歴史家たちとの交流は、『入来文書』完成後の三〇年代に活発になり、書簡も多く残されている。三〇年代に作成された草稿も数多い。従って「朝河ペーパーズ」の調査を進めることによって、『入来文書』後の朝河について、より具体的な議論の進展が期待されるのである。

今後重点的に調査していく必要がある課題として、次の三点を提示したい。

第一は、「朝河ペーパーズ」に含まれる草稿の検討である。(四)で述べたように、封建制論に関する未紹介草稿の研究が求められる。また、(六)・(八)の西洋史関係のカード・草稿についても調査・検討を進める必要がある。従来看過されがちな点であるが、朝河は一九二三年以降、イェール大学では西欧法制史の講座を担当していた。学問的トレーニングをアメリカで受けた朝河は、西洋史家の堀米庸三によって「完全にヨーロッパの中世専門家の言葉をもって思考し叙述した」た「完全なヨーロッパ的能力をそなえた日本人、いや同時に日本人でもあったヨーロッパのメデイーヴァリスト」であったと評価されている⁽¹⁹⁾。従って朝河の日本封建制研究を把握するためには、朝河の西欧封建制論を知ることが不可欠になるはずであるが、西欧史に関する著作を朝河はほとんど残していない。朝河の西洋封建制理解を知る手がかりが、「朝河ペーパーズ」の草稿やノートの中にあるのである。

第二は、『書簡集』未収録分の膨大な書簡の調査である。受発信者、

年月日など基礎的な情報を押さえた目録の作成が急務である。著名な事実ではあったが、必ずしも具体的に研究されてこなかった朝河とマルク・ブロックら西欧の歴史学者との交流についても、未収録の朝河宛ブロック書簡などを用いた再検討が期待される。

第三は、「Japan Chronicle」（日本年代記）を中心とするカード類の精査である。従来の朝河研究において最も手薄であった『入来文書』以後、一九三〇・四〇年代の朝河の研究の軌跡を追う最大の手掛かりである。

この内、第三の点について、本章では「朝河ペーパーズ」を用いて次の二点を明らかにしたい。一つ目は『入来文書』後の朝河の比較封建制論が如何なる展開を見せようとしていたのかという問題であり、二つ目は何故朝河の比較封建制論が「未完」に終わったのかという問題である。

第二節 『南九州の封建体制』の構想——一九三〇年代

『入来文書』後の朝河はある著作の準備に忙殺されていた。意外に知られていない事実であるが、『入来文書』の中で再三、朝河は「南九州の封建体制」の刊行を予告していた⁽²⁰⁾。これは島津家を軸にして南九州における封建体制の自立的な展開を叙述する研究書であり、史料集としての『入来文書』とペアになるはずであったが、未完に終わった。

だが、「朝河ペーパーズ」のなかには『南九州の封建体制』の構想を推測させる材料が存在する。まずはボックス8フォルダ86の「Feudal Regime in South Kyushu」（南九州の封建体制）と題されたタイプ打ちの原稿である。序・目次・本文含めて四五枚の短いもので、

「目次」から全体の構想を判断するに、第一章の半ば（鎌倉初頭）で中断していることが分かる。この「目次」の構成は、一見して『入来文書』の“Summary of Points”（論点の要約）に類似しているが、構成の変更点も大きい（なおフォルダ89には「論点の要約」の日本語版草稿が収められている）。『南九州の封建体制』の構想を考える上で、「目次」は検討素材となる。

さらにボックス38〜45に収められている“Japan Chronicle”（日本年代記）というルーズリーフ群の存在が興味深い。「日本年代記」は一一七九年から一八七七年（西南戦争）まで続く「島津家年譜」というべき島津家関連年表と、幕末から一九四五年まで続く「年表」との二種類の編年譜から構成される。紙数の都合から詳細は別の機会に行うが、フォルダ118は薩摩国の比志島家とその文書、フォルダ120は大隅国の禰寝家とその文書に関するメモであり、これによつて朝河が『入来文書』の入来氏とは別に、島津氏と比志島氏・禰寝氏との関係を「南九州の封建体制」の重要な構図として描こうとしていたことが明らかになった。「島津家年譜」の構成は、ボックス31〜34の（『入来文書』の草稿の切り貼りを伴う）カード群の編年構成とほぼ同じくものであり、『日本』（畿内）に対する「南九州」という『地域』における封建制の独自の発展をめぐる朝河の構想を示している。これらのノートや『入来文書』の序や「論点の要約」とあわせて、朝河の未完の著『南九州の封建体制』の構想について具体的に検討することが可能となる。²¹⁾

ところが、朝河は三〇年代前半には『南九州の封建体制』執筆へのプレッシャーについてしばしば発言しているものの、それ以降は「南九州」への言及がなくなってしまう。前述のように、ボックス10に

は封建社会の性質に関する一四種類の草稿群が存在するが、作成年代の明らかな下限は一九三七年正月である。一九三六年から三七年にかけて、朝河が比較封建論をまとめにかかっていたのと同時に、三七年以降、朝河の比較封建制研究が中途していることも明らかなのである。これらの事実から、「朝河ペーパーズ」にみえる『南九州の封建体制』関係の草稿・「島津家年譜」の主な成立年代もまた一九三〇年代と予想されるが、その成立時期については、その内容の詳細な分析と合わせて、なお今後の検討課題にしたい。²³⁾

第三節 国民性の比較史研究への道——三〇年代末〜一九四八年

それでは朝河の比較封建論は何故「未完」に終わったのだろうか。朝河の封建論に内在する「未完」の理由については『南九州の封建体制』を再検討する中で見えてくると予想されるが、朝河の置かれた時代状況の中でこの問題を考える手掛かりになる資料が、前章でも分析した「日本年代記」である。「年代記」が前近代の島津家年譜（『南九州の封建体制』と近代史「年表」とで二重構造になっている点は前述したが、維新・近代史のほうが前近代よりも分量は圧倒的に多い（フォルダ数では約六対一）。この資料を閲覧した宮本又次が「彼の研究の重点が開国後の近代史におかれていたことがうかがえる」という証言を残していることも頷けるが、問題はこの近代史「年表」がいっ作成されたかであろう。

フォルダ127に一八四六年の「年表」が現れ、以後一九四四年まで「年表」は毎年続くが、この「年表」を軸にして「日本年代記」の近代編はまとめられている。一八四六年の「年表」の右上隅には「表一」「維新史料編纂会（維新史料綱要一）1937」という注記がな

れている。『維新史料綱要』とは一九三七〜四〇年に日本で出版された年表（弘化三（一八四六）年〜明治四（一八七一）年）であり、「年表」はここからの抜き書きである。なお『維新史料綱要』がカバーしなくなった年代は、日置昌一著『国史大年表』（平凡社、一九三五・六年）が利用されている。一九三五年の年表の素材は記されていないが（フォルタ169）、一九三六年以降四年までは「the annual registers」（一七五八年以降、毎年前年の政治・経済・社会上の世界情勢を回顧して刊行される年鑑）が利用されている。以上、「年表」の作成時期は一九三七年以降であると推定される。この推定は、三十七年以降朝河の比較封建制研究が中途するという前節の推定とも符合する。

一九三七年以降の「年表」作成の背景を探るために、晩年の朝河の残した書簡を見ていくと、三〇年代後半には祖国日本を憂うる記述が目立つようになる。具体的な行動は、日本の友人・知人への書簡での働きかけとして表われる。一九四〇年九月及び一〇月には村田勉に対して、「攘夷ノ固陋ニ立チ戻」る祖国日本の現状についてドイツ人の国民性と比較しながら長大な書簡を認めており、同じ頃「日本の政治的な心の知的な傾向と、これら心的な習性のうちの最悪の面がいくつか近年にいたって過度のものとなってきた経緯」及びそれが政治に与えた悪影響についての「独自の歴史的な分析」を試み、それを書簡にして日本に送ったらしい。²⁶この「独自の歴史的な分析」の詳細は不明であるが、村田宛書簡の中で「攘夷」の心性や「日本民族ノ維新数十年ノ例」に論及して「後便」を期しているところから、「年代記」の近代史「年表」に対応する内容であると推測される。

一九四三年一月一日付H・ダンナム宛書簡によると、朝河は「日本国民の歴史的、心理的習性とその展開についての研究―これは私の

主要分野に関係するものではありませんが、それにしても結局は副次的な問題です」に「数年間」を費やしていた。²⁸三〇年代末から朝河の関心は、「主要分野」の封建制研究そのものではなく、封建契約の特質や武士道・騎士道などの倫理が、現代の諸国民にどのような影響を与えているのかという国民性の比較研究に発展したのである。²⁹新しいテーマの下、朝河は「年代記」にみえる維新时期以来の膨大な近代史カードを作成する一方、戦後日本の復興のための覚書を数多く残している。それらは結局公刊されず、「未完」に終わった。その具体的な内容や所謂「日本人論」・国民性論の系譜における位置付けやアメリカの人類学との関係などは今後の大きな研究課題であるが、我々は「日本年代記」そのものに、時代に向き合った朝河という歴史家の足跡を見据えることができるのである。

結

最後に「朝河ペーパーズ」の保存・公開の在り方について言及することと結びにかえたい。このように歴史家の書簡・ノート等の私的文書がまとまって保存・公開されているケースは、日本では必ずしも多くはない。その状況を考慮すれば、「朝河ペーパーズ」及び朝河貫一の研究を通じて、朝河と交流のあった日本の歴史家たちに関して史上の新知見を得られる可能性は決して小さくないと考える。

日本における利用を考える際、「朝河ペーパーズ」の全六〇ボックス中一四ボックスしかマイクロフィルム化されていないことは看過し得ない。特にマイクロフィルム化されていない資料の中には、バラバラの状態のルーズリーフやカード類が多い。つまり現状の配列に錯簡

が生じることによって資料群に伴う情報の破壊が危惧される性格の形態の資料が少なくない。⁽³⁰⁾ 海外の日本関係資料の保存に関して、日本の研究者がどう関わっていくべきかは今後大きな問題となろう。

以上、特に書簡・カードなど一点一点に関する十分な調査は行えず、不十分なものであるが、本稿が今後の朝河研究の進展と封建制論をめぐる史学史の見直しのための踏み台になれば幸いである。

【付記】本稿作成の土台となった二〇〇八年三月の資料調査は、「日本学およびそれに関連する人文学と社会科学のための東大―イェール・イニシアティブ」の資料調査研修を利用して行った。また同年九月の調査は、平成二〇年度（前期）東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）の補助を得て行い、堀内和宏氏の協力を得た。東京大学の関係者、そしてイェール大学マニユスクリプト&アーカイブズ部及び東アジア図書館の関係者の皆様にお世話になった旨を記させていただきます。

註

- (1) 朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』（早稲田大学出版部、一九九三年）、同編『甦る朝河貫一』（朝河貫一研究会、一九九八年）など。一九九七年以前の研究については『甦る朝河貫一』所収「朝河貫一関係文献目録」参照。矢吹晋氏による朝河の邦訳とは、『入来文書』（二〇〇五年）及び『大化改新』（二〇〇六年、原題“The Early Institutional Life in Japan”一九〇二年のイェール大の学位論文を一九〇三年出版したもの）、論文・書評などをまとめた『朝河貫一比較封建制論集』（二〇〇七年、何れも柏書房）の邦訳三部作である。『入来文書』の翻訳の問題点について

は新田一郎「学界展望 日本法制史」（『国家学会雑誌』一二〇（九・一〇）、二〇〇七年）。研究史の詳細は、別稿「朝河貫一の比較封建制論の再評価をめぐって―イェール大学図書館所蔵「朝河ペーパーズ」の紹介」（『歴史評論』七〇八号、二〇〇九年四月 以下【別稿】）参照。

- (2) 網野善彦・横井清共著『日本の中世6 都市と職能民の活動』（中央公論新社、二〇〇三年）五二頁以下。

- (3) 牧健二「朝河貫一氏の英文『入来文書』に就いて」（『法学論叢』二二巻二号）。

- (4) 朝河の比較封建制論については前掲【別稿】でも簡単に論じている。

- (5) 阿部善雄の評伝『最後の「日本人」においても「朝河ペーパーズ」は利用されていたと推定されるが、同書には利用した資料の典拠がほとんど記されていない。但し、『書簡集』所収の金井圓「朝河貫一、その受発信書簡について」五五頁、及び宮本又次編『アメリカの日本研究』（東洋経済新報社、一九七〇年）第一編第四章「各大学における日本史研究」（宮本又次執筆）三〇頁などに言及がある。

- (6) 増井「朝河貫一の日記に表われた国際化時代の日本―1917-1919年」（『敬愛大学国際研究』一七号、二〇〇六年七月）をはじめとする『敬愛大学国際研究』所収の諸論文。朝河貫一研究会編『朝河貫一研究会ニュース』（朝河貫一研究会、二〇〇七年）所収記事にも「朝河ペーパーズ」への言及はある。

- (7) <http://msalibrary.yale.edu/fundaid> 同図書館の整理番号「40」（最終更新日二〇〇六年一月三〇日）。

- (8) なお早稲田大学アジア太平洋研究センターがイエール大学所蔵のマイクロフィルムを複製した「エール大学所蔵朝河貫一文書」を所蔵している。
- (9) 詳しくは『書簡集』所収の金井圓「朝河貫一、その受発信書簡について」五四頁の表参照。
- (10) 『書簡集』六一頁。
- (11) このサンソム書簡は『書簡集』に収録されている(付一五号)。なお『書簡集』付二〇号の無年号の十二月一二日付サンソム書簡にみえる、同月中に朝河がサンソムに送った班田収授に関する覚書とは、このレポートと同一のものである可能性が高い。だとすれば、付二〇号は『書簡集』編者は一九四〇年に比定するが一九三五年に比定されるが、同書簡中の表現(“after the February meeting”など)との整合性が問題になる。サンソムの足取りと合わせて、今後の研究を要する。
- (12) 「概要」では「Notes」と記すが、日本語にいうカード類を指す。
- (13) 『書簡集』一三九号。
- (14) この抜き刷りでは検閲の際に伏字となった部分が朝河の自筆で補われている。矢吹晋「朝河貫一とその時代」(花伝社、二〇〇七年)二八八〜九一頁。
- (15) 『書簡集』七六号。
- (16) 国文学研究資料館文献資料部編「イエール大学所蔵日本文書コレクション目録」(『国文学研究資料館 調査研究報告』十一号、一九九〇年)、小峰和明「議会図書館及びイエール大学所蔵朝川収集本をめぐる」(“Early Modern Japan : an interdisciplinary Journal Spring (2004)”)。
- (17) YAJコレクションについては、阿部善雄『最後の日本人』(岩波現代文庫、二〇〇四年)一六一頁以下に詳しい。
- (18) この資料については増井由紀美「朝河貫一…自覚ある「国際人」―明治末から大正にかけてイエール大学に見る日本人研究者事情」(『敬愛大学国際研究』第十八号、二〇〇六年)に詳しい。
- (19) 堀米庸三「封建制再評価への試論」(『歴史の意味』中央公論社、一九七〇年、初出一九六六年)一六六頁。
- (20) 『入来文書』一頁(矢吹訳一四頁)。
- (21) 朝河が南九州を選択した事情については、前掲【別稿】参照。
- (22) 『書簡集』一六八号、一九二号。なお一二六号も参考。
- (23) 例えば、一八七六年の「島津家年譜」は一九三七年刊の『国史大年表』を利用しており、大政奉還から西南戦争まで記述された部分は一九四〇年代に新たに作成された可能性がある。
- (24) 前掲『アメリカの日本研究』三〇頁。
- (25) 『書簡集』一二四・一二五号。
- (26) 『書簡集』一三三三号。
- (27) 『書簡集』一二五号。
- (28) 『書簡集』二六一号。
- (29) 阿部善雄『最後の日本人』第十一章においても朝河が「国民性」への関心を深めていったことが指摘されている(岩波現代文庫版二八七頁)、このことと「日本年代記」にみられる朝河の研究活動との関連は検討されていない。
- (30) 新田一郎氏及びイエール大学図書館の中村治子氏の意見を伺う機会を得た。

【イェール大学図書館所蔵朝河貫一文書（朝河ペーパーズ）全六〇箱 目録】

*ボックス（Box）とフォルダ（folder）を軸に整理したものである。

*フォルダごとに同図書館所蔵マイクロフィルム（全一〇リール）の対応リール（reel）を記した。

Box	folder	reel	説 明（備 考）
1	1	1	書簡（1895～98年）
1	2	1	書簡（1899年1月～6月）
1	3	1	書簡（1899年7月～12月）
1	4	1	書簡（1900年頃）
1	5	1	書簡（1900年）
1	6	1	書簡（1901～02年）
1	7	1	書簡（1903年）
1	8	1	書簡（1904年）
1	9	1	書簡（1905年1月～6月）
1	10	1	書簡（1905年7月～8月）
1	11	1	書簡（1905年9月～10月）
1	12	1	書簡（1905年11月～12月）
1	13	1	書簡（1906年1月～9月）
1	14	1	書簡（1906年10月～12月）
2	15	1	書簡（1907年1月～4月）
2	16	2	書簡（1907年5月～6月）
2	17	2	書簡（1907年7月～12月）
2	18	2	書簡（1908年、1910～11年）
2	19	2	書簡（1912年）
2	20	2	書簡（1913～14年）
2	21	2	書簡（1915～22年）
2	22	2	書簡（1923～25年）
2	23	2	書簡（1926～27年）
2	24	2	書簡（1928年）
2	25	2	書簡（1929年1月～8月）
2	26	2	書簡（1929年9月～12月）
3	27	2	書簡（1930年1月～9月）
3	28	2	書簡（1930年9月～12月）
3	29	2	書簡（1931～39年）
3	30	2	書簡（1940年）
3	31	2	書簡（1941年2月～11月）
3	32	3	書簡（1941年12月）
3	33	3	書簡（1942年1月～3月）
3	34	3	書簡（1942年4月～12月）
3	35	3	書簡（1943～44年）
3	36	3	書簡（1945～46年）
3	37	3	書簡（1947～48年）
3	38	3	書簡（1949～51年、55年）
4	39	3	書簡（朝河の家族との往復書簡 凡そ1895年）
4	40	3	書簡（ブース、1906年・14年）
4	41	3	書簡（ブース、1915年・26年）
4	42	3	書簡（Privy Councilor-Count K 1941年10月10日付）
4	43	3	書簡（フランクリン・ルーズヴェルトへの書簡、1941年11月23日付）
4	44	3	レジユメ
5	45	4	日記（1900年～05年）

Box	folder	reel	説 明 (備 考)
5	46	4	日記 (1911年)
5	47	4	日記 (1912~13年)
5	48	4	日記 (1914年)
5	49	4	日記 (1915年)
5	50	4	日記 (1916~17年 3月24日)
5	51	5	日記 (1917年 3月25日~1919年11月13日)
5	52	5	日記 (1919年11月15日~1925年 1月 8日)
5	53	5	日記 (1925年 2月 1日~10月11日)
6	54	5	日記 (1940年 7月28日~ 8月14日)
6	55	5	日記 (1945年11月25日、1946年11月22日)
6	56	5	日記 (1946年11月25日、1948年 8月 8日)
7	57~66	6	発信書簡などの控えなど10点
7	67	6	Appointment Book (内題「日記目録」) 1911~25年 *面会人名録
7	68	6	出版物 "Note on Village Government in Japan After1600"
7	69	6	出版物 (1) "WHY AND HOW JAPANESE HISTORY MAY BE STUDIED WITH PROFIT IN AMERICA."
7	69	6	出版物 (2) "TO PAPAN (??? Sep16, 05)"
7	69	6	出版物 (3) "JAPANESE and KOREA (the Dartmouth Bi-Monthly vol. 1 No 1 Oct 05)"
7	69	6	出版物 (4) "The Early Sho and the early Monor : Feb 1929,"
7	69	6	出版物 (5) "HAT MANUFACTURING IN RENNES, 1776 - 1789 Its Financial and Commercial Organization HENRI SEE"
7	69	6	雑多なメモ
7	69	6	出版物 (6) "JAPANESE FEAUDALISM" by K.Asakawa 1931 (Encyclopaedia of the Social Sciences)
7	70	6	新聞の切り抜き (1914年及び1923年頃)
7	71・72	6	書評草稿 (『日本奴隷史』『堺市史』など)
7	73	6	書評草稿 (ヴェーレル氏古日耳曼民族農業成立論、竹越与三郎『日本経済史』)
7	74	6	原稿・草稿 "The Missionary Question in China"
7	75	6	原稿・草稿 "THE TRAGIC CAREER OF HAMLET considered as a real person.) Written January 19-23, and typewritten February 6 and 7, 1914. (二部)
7	76	6	原稿・草稿 「第五章 究竟の疑」 (断簡含めて数部あり)
7	77	6	原稿・草稿 I.A.L.A. (国際補助語協会) Papers 1927-29 (複数の書簡と手稿・タイプ、エスペラント関係)
7	78	6	原稿・草稿 "Period of Academic Dissipline"
7	79	6	原稿・草稿 "A Plea for Friendly Competition Among Interlingsists"
8	80	6	原稿・草稿 Allotment of rice-land : K.Asakawa (Given to Sir George B.Sansom, Dec. 6, 1935.)
8	81	6	原稿・草稿 "Bushido" 1905
8	82	6	原稿・草稿 "Cataloging Japanese personal names" (手稿、手紙、ノート表紙、タイプなど多数)
8	83	6	原稿・草稿 "Character of Japanese People" (手稿のメモ)
8	84	7	原稿・草稿 "early Institutional life of Japan" (『大化改新』タイプ)
8	85	7	原稿・草稿 "Evolution of the Fief - in Japan" (一頁目左上に鉛筆で「未完」/タイプ・手稿など計5部)
8	86	7	原稿・草稿 "Feudal Regime in South Kyushu"
8	87	7	原稿・草稿 "Feudalism in Japan"
8	88	7	原稿・草稿 "The Founding of the Shogunate by Minamoto-no-Yoritomo"
8	89	7	原稿・草稿 "Iriki : Summary of Points" (英語版及び日本語版)
8	90	7	原稿・草稿 "Japan Old and New" 1912 及び "APPENDIX ON THE LATE EMPEROR AS A CONSTITUTIONAL MONARCH" (明治天皇論)

Box	folder	reel	説明 (備考)
8	91	7	原稿・草稿 "The Japanese in Siam in the early 17th century"
8	92	7	卒業論文 "A PRELIMINARY STUDY OF JAPANESE FEUDALISM" Kan-ichi Asakawa. (Hanover, N.H. Feb, 1899) (論文題表紙、目次と原稿90頁)
8	93	7	原稿・草稿 日本封建制に関する日本語・英文の手稿
9	94	7	原稿・草稿 日本封建制に関する英文手稿
9	95	7	原稿・草稿 荘園毎のカード (日本語)、高野山文書目録の表紙
9	96	7	原稿・草稿 日本美術史 (1) JAPANESE 'UKIYO-YE' (sciern genre) PAINTERS
9	96	7	原稿・草稿 日本美術史 (2) JAPANESE BUDDHIST SCULPTURE IN REPRODUCTION Case I, 7th to 14th century
9	96	7	原稿・草稿 日本美術史 (3) 同上
9	97	7	原稿・草稿 Japanese reform polity in 7th-9th centuries (英文手書きカード)
9	98	8	原稿・草稿 "The Life of A Monastic sho in Medieval Japan" 1916 草稿3部
9	99	8	原稿・草稿 "The Origin of Feudal Land Tenure in Japan" 1914 草稿2部
10	100	8	ノート 「H社会の性」 BとAの符号をつけられた草稿2部 (日本語手稿)
10	101	8	原稿・草稿 "Nature of the Feudal Society" (Tentative, not to be published) 英文タイプ
10	102	8	原稿・草稿 "Nature of the Feudal Society" 英文タイプ・手稿
10	103	8	原稿・草稿 "Social Causes" 英文手稿
10	104	8	原稿・草稿 "Nature of The Feudal Society" (Tentative, not to be published) Nov 10, 1936 作成 Jen 27, 1937改稿タイプ
10	105	8	原稿・草稿 レジユメ「Feudal 社会の性」 47頁 日本語手稿 末尾にメモ2枚
10	106	8	原稿・草稿 "Nature of the Feudal Society" (Tentative, not to be published) Sept, 1932 英文タイプ
10	107	8	原稿・草稿 "Introduction II The Nature of the Feudal Society" 英文タイプ
10	107	8	原稿・草稿 "Nature of the Feudal Society" Oct 10, 1936 英文タイプ
10	108	8	原稿・草稿 "Nature of the Feudal Society" 英文タイプ、手稿
10	108	8	原稿・草稿 "Introduction I Causes of Feudalisms" 英文タイプ76頁
10	108	8	原稿・草稿 "Introduction I Causes of Feudalisms" 英文手稿
10	108	8	原稿・草稿 "Introduction I Causes of Feudalisms" 英文タイプ、76頁
10	109	8	原稿・草稿 「比較論」 (英文タイプ、一頁目に鉛筆で「未完」、88頁)
10	110	8	ゲストブック (Sep. '08 - June 14, 1911)
10	110	8	ゲストブック (July 1930 Oct 1932 August 1935)
11~13			カード (西欧近代史関係)
14~24			カード (フランス近代史関係)
25			カード (日本史関係)
26			カード (日本史総説)
27			カード (日本史雑録)
28			カード (日本史雑録)
29・30			カード (日本古代史関係)
31~34			カード (島津家関係)
35			カード (日本の家族関係)
36			カード (日本の皇室関係)
37	111		「今後ノ新日本ニオケル個人ノ展望」 (ルーズリーフの草稿)
37	112		1943年頃の新聞の切り抜き、メモ (「自超」、「反省」、「文化ノ防衛ト受容」、「過去ノ皇室利用者」 (1941年) など)
37	113		戦後日本の復興に関する覚書
37	114		日本宗教史の年表・レジユメ (17枚タイプ打ち)、英文の日本地図、印刷物など

Box	folder	reel	説明 (備考)
37	115		日本人の倫理や東条英機に関するメモ (1945年以降作成)
37	116		島津国史の史料批判に関するメモ (得能通昭私著〈西藩野史〉ノ史学及史著の観念／島津国史由来・島津國史ノ史学及史著の観念)
37	117		「1336-93 日向ノ庄崩ル」に始まるルーズリーフ16枚 (*Japanese chroniclesの一部か)
38	118		Japanese chronicles 1172-1331 (比志島家文書)
38	119		Japanese chronicles 1179-1333 (忠久・忠時・忠宗・貞久年譜「以下別冊」)
38	120		Japanese chronicles 1187-1416 (禰寝文書)
38	121		Japanese chronicles 1333-1348 (島津家年譜)
38	122		Japanese chronicles 1349-1367 (島津家年譜)
38	123		Japanese chronicles 1368-1508 (島津家年譜)
38	124		Japanese chronicles 1509-1602 (島津家年譜)
38	125		Japanese chronicles 1603-1699 (島津家年譜)
39	126		Japanese chronicles 1700-1806 (島津家年譜)
39	127		Japanese chronicles 1809-1852 (島津家年譜・近代史年表)
39	128		Japanese chronicles 1853-開国関係
39	129		Japanese chronicles 1853-1854攘夷関係
39	130		Japanese chronicles 1854年7月~12月 (島津家年譜・近代史年表)
39	131		Japanese chronicles 1855 外国関係
39	132		Japanese chronicles 1856 外国関係
39	133		Japanese chronicles 1857 外国関係
39	134		Japanese chronicles 1857 (島津家年譜・近代史年表)
39	135		Japanese chronicles 1857 徳川斉昭関係
40	136		Japanese chronicles 1858 幕府関係
40	137		Japanese chronicles 1858 外交関係
40	138		Japanese chronicles 1858 徳川斉昭関係
40	139		Japanese chronicles 1858 重要な日付
40	140		Japanese chronicles 1859 外交関係
40	141		Japanese chronicles 1859 幕府関係
40	142		Japanese chronicles 1859 重要な日付
40	143		Japanese chronicles 1860 (島津家年譜・近代史年表)
40	144		Japanese chronicles 1861 (島津家年譜・近代史年表)
40	145		Japanese chronicles 1862 (島津家年譜・近代史年表)
40	146		Japanese chronicles 1863 (島津家年譜・近代史年表)
41	147		Japanese chronicles 1864 (島津家年譜・近代史年表)
41	148		Japanese chronicles 1865-66 (島津家年譜・近代史年表)
41	149		Japanese chronicles 1867 外交関係
41	150		Japanese chronicles 1867 島津久光譜
41	151		Japanese chronicles 1868 外交関係
41	152		Japanese chronicles 1868 島津久光譜
41	153		Japanese chronicles 1869 (島津家年譜・近代史年表)
41	154		Japanese chronicles 1870 (島津家年譜・近代史年表)
41	155		Japanese chronicles 1871 (島津家年譜・近代史年表)
42	156		Japanese chronicles 1872-75 (島津家年譜・近代史年表)
42	157		Japanese chronicles 1876-90 (島津家年譜・近代史年表)
42	158		Japanese chronicles 1891-99 (近代史年表)
42	159		Japanese chronicles 1900-09 (近代史年表)
42	160		Japanese chronicles 1910-19 (近代史年表)

Box	folder	reel	説明 (備考)
42	161		Japanese chronicles 1920 - 25 (近代史年表)
42	162		Japanese chronicles 1926 - 31 (近代史年表)
42	163		Japanese chronicles 1931 - 34 (近代史年表)
42	164		Japanese chronicles 1932 (近代史年表)
42	165		Japanese chronicles 1933 (近代史年表)
42	166		Japanese chronicles 1933 (近代史年表)
43	167		Japanese chronicles 1934 (近代史年表)
43	168		Japanese chronicles 1935 (近代史年表)
43	169		Japanese chronicles 1935 (近代史年表)
43	170		Japanese chronicles 1936 外国関係
43	171		Japanese chronicles 1936 政府関係
43	172		Japanese chronicles 1936 重要な日付
43	173		Japanese chronicles 1936 - Interral affairs
44	174		Japanese chronicles 1937年1月 (近代史年表)
44	175		Japanese chronicles 1937年1月・2月新聞切り抜きなど
44	176		Japanese chronicles 1937年3月4月新聞切り抜きなど
44	177		Japanese chronicles 1937年4月～7月新聞切り抜きなど
44	178		Japanese chronicles 1937年7月新聞切り抜きなど
44	179		Japanese chronicles 1937年7月～11月新聞切り抜きなど
44	180		Japanese chronicles 1937年10月～12月新聞切り抜き
44	181		Japanese chronicles 1938～40 (近代史年表)
45	182		Japanese chronicles 1941年のメモ (Loose Leaf Organizer / 近衛公日米交渉手記 (「近衛公・日米交渉史他 目録」「日米交渉—近衛ノ心境」) / 45八 / 廿九 Army Board report補遺 / 「開戦迄ノ史実提要」 / 1941 Dec 7 の新聞の切り抜き (New York Times, Aug 30, 1945) Army reportなど)
45	183		Japanese chronicles 1941 (近代史年表)、メモ「十二ノヒマデノ日本行為」
45	184		Japanese chronicles 1942 (近代史年表)
45	185		Japanese chronicles 1943 (近代史年表)
45	186		Japanese chronicles 1944 (近代史年表)
45	187		Japanese chronicles 1945 日本降伏までのメモ (「追水久常」)
46	188		H・メインの読書ノート "Study of Ancient Law" (表紙に鉛筆で "Dec. 1897")、"Lectures on the early history of institutions" (表紙に鉛筆で "March 1898")、"Dissertations on early law and custom" (表紙に鉛筆で "April 1898")
46	189		ノート Solid geometry
46	190		ノート Early modern philosophy
46	191		ノート 表題「大西先生述 近世哲学史」
46	192		ノート Greek philosophy
46	193		ノート Greek philosophy
46	194		ノート Japan-Bushido 1906, 07
46	195		ノート 表題「明治二七年九月廿八日申述 小屋保治氏述 美学」
46	196		ノート Buddhism 1895 Mar
46	197		ノート 表題「松本文三郎氏述 支那哲学史」一、二、三 但し合冊
47	198		ノート "Ancient Germans, Dec. 19, 1898"
47	199		ノート "notes on logic, by Mr. Asakawa Prof. yanaga"
47	200		ノート Biographia hiteraria Coleridge, S.T.
47	201		「頭山満の死 1944 Oct. 5」以下頭山満関係の手稿草稿
47	202		英国史関係ノート
47	203		新聞の切り抜き、「今日の日本兵士」('43 May 22)、西洋哲学等のカード
47	204		エジプト・バビロン史関係のノート

Box	folder	reel	説 明 (備 考)
47	205		封建制関係ノート
47	206		ドイツ史関係ノート (ゲヴェーレなど) 索引カード
47	207		ゲーテ関係ノート
47	208		ギリシア・ローマ都市国家関係ノート (合冊、二冊目に赤鉛筆で "March 5, 1898" と記入)
47	209		大ノート 「波斯戦争」 Jonian Sevolt (Holn II. 1)
47	210		ギリシア史関係ノート (1899)
47	211		ギリシア史関係 (赤鉛筆「希臘史」) 付、国民新聞記事切り抜き (「蘇峰生」の「青燈一點」など)
48	212		カードの束 8点: 各束冒頭の題「頼朝 I ('33)」「The land tunure 起源」「日史上ノ農業」「余ノ諸文ノ要目索引」「monastic 庄一索引」「分類表」「fn 貢獻」Ⅲ 古稿 目次
48	213		『入来文書』図版 (No24bとNo127D～No138) カード (縦26.0cm横19.2cm)
48	214		『入来文書』の史料編 (日本語) の未製本の紙の束 (ところどころに切り抜き)
48	215		「渋谷氏系図」と「寺尾氏系図」の合冊 (後者表紙に鉛筆で「Sep21'20」) 縦25.2cm横17.0cmの紙を製本、背表紙の題「入来院寺尾武光系譜」
48	216		マルク・ブロック『封建社会』Ⅲの読書ノート (1940)
48	217		"W. Words worth on Imagination and Fancy (in his Preface to poems, 1815)"
48	218		man and person に関するノート
49	219		「国と個人」と題された覚書のカード
49	220		Nation and natural religious に関するノート
49	221		ナショナリズムに関するノート
49	222		自然科学及び政治に関するノート
49	223		政治学 (Political science) に関するノート 1896-97年
49	224		Precis, Martin Oliver
49	225		原始アーリア人 (Primitive Aryans) に関するノート 1896年
49	226		原始文明 (Primitive Civilizations) に関するノート
49	227		原始的土地保有 (Primitive land tunures) に関するノート
49	228		古代ローマに関するノート
49	229		古代ローマ法に関するノート
50	230~234		西洋史関係のメモ類 *フォルダ233にはノート「歴史雑俎 古代・中古・近世初期」(1898-99 ダートマス大学)
51	235	8	論文 "Parliamentary Reform of England in 1831-32, and Electoral Reform of France in 1847-48" 表紙 (手稿で "April 29, 1901")、目次、論文 (103頁)
51	236	8	論文 "Effect of Colonization on the Trade Policy of the Colonizing Nations" (手稿79頁)
51	237	9	論文 "Legislative Powers of the Carolingian King" (タイプ78頁、手書きメモ)
52	238	9	写真2枚 (「大正六年」, "June 5, 1919")
52	239	9	朝河の写真2枚
52	240	9	写真多数 (両親、風景など)
53	241		「前田本 まくらの草子」昭和二年 非売品
53	242		「色葉字類抄」上 大正十五年
53	243		ループネル氏への朝河書評の抜刷、「色葉字類抄」下
53	244		"INDIVIDUALISM : TRUE AND FALSE" (F.A. ハイエク, 1946年)、中田薫「日本庄園の系統 王朝時代の庄園に関する研究」合冊、「職原抄摘要」
54	245		「島津忠久の生い立ち」他論文5点 (英文、別人の論文)
54	246		『日本の禍機』東京実業社、1909年
54	247		蚊田蒼生校訂『古今和歌集』上下、『新古今和歌集』上下 (東京書肆 白楽圃板)
55	248	9	学生のレポート 1934年 (上端を綴じて冊子状に。以下同)
55	249	9	学生のレポート 1911年

Box	folder	reel	説 明 (備 考)
55	250	9	学生のレポート 1926年 及び点数表1枚
55	251	9	学生のレポート 1926年及びその前後 (G.W.Pierson, Reiehankeek, Carlton Pwees, Miss Margaret Yerrinton)
55	252	9	学生のレポート ローマの "Possessio" とゲルマンの "Gewere" の違い
55	252	9	学生のレポート Fealtyについて
55	252	9	学生のレポート Define feudalism について
55	252	9	学生のレポート French feudalism について
55	252	9	学生のレポート feudalism について
55	253	9	学生の論文 "ROLLO AND THE TREATY OF SAINT-CLAIR-SUR-EPTÉ" by Issac J.Quillen The Frankish Period-April 18, 1913
55	254	9	学生の論文 "THE POSITION OF THE EMPEROR IN CHINA AND JAPAN : A religious and institutional study A comparison of their historical development" Being a year paper for the course Religious History of Japan Submitted by Lucy H. Booth June, 1923
55	255	9	学生の論文 "THE TEACHINGS OF THE TWO GREAT SECTS OF MODERN BUDDHISM" by J.S.Bixler June 1923
55	256	9	学生の論文 "NITHARD" 1926 - 27
55	257	9	学生の論文 "A SUMMARY OF THE CAPITULARS DE VILLIS OF CHARLEMAGNE" by Courteney Hemenway January 1927
55	258	9	学生の論文 "USATICI" by M.G.Yerrinton
55	258	9	学生の論文 "THE ANNALS OF SAINT-BERTIN 870 - 877" by M.G.Yerrinton
55	259	9	学生の論文 "The Growth of the Royal Domain in France, 987 - 1223" by Carl h. Reicheukarl Yale University [1927/28]
55	259	9	学生の論文 "BONIFACE AND THE CHURCH" by G.W.Pierson
55	260	9	学生の論文 "Evideness of Patoronage in the Works of Einhard" by Carl H. Heichenbach [1927 - 28]
55	261	9	学生の論文 "SOME EXAMPLES OF HOMAGE IN FRANCE FROM 1160 TO 1500" by Carlton Prince West Gracuate School, Yale University June 1928.
55	262	9	学生の論文 "NORMAN FEUDALISM IN WACE'S POEM ROMAN DE ROU" by Philip Lee Ralch Yale University, June 4, 1928
55	262	9	学生の論文 "THE ROYAL DOMAIN IN CHARLEMAGNE'S TIME" by Carlton Prince West Yale University Graduate School 1928
56	263	9	学生の論文 "THE GRANTING OF NORMANDY TO ROLLO" by Philip Lee Ralph Yale University, April, 1928
56	263	9	学生の論文 "Feudal Oustee for (以下不明)" by Fransees H, Sgeeie
56	263	9	学生の論文 "THE FEUDAL CHARACTERISTICS OF THE TRIAL OF GANELON in the CHANSON DE ROLAND" by G.W.Pierson June 3, 1928
56	264	9	学生の論文 "Trial of Henry the king"
56	265	9	学生の論文 "THE COUNT AS FEADAL SUZERAIN AND HEAD OF THE STATE IN THE USAGES OF BARCELONA" by Cecil F. Robe 1933 - 4
56	265	9	学生の論文 "JURIDICAL ASPECTS OF THE RIVALRY BETWEEN JOHN LACKLAND AND PHILIP AUGUSTUS" by David M. Potter, Jr.
56	265	9	学生のレポート ローマの "Possessio" とゲルマンの "Gewere" の違い (John Toop 1934 という表紙)
56	266	9	学生の論文 "FRANKISH INSTITUTIONS OF VASSALAGE AS THEY APPEAR IN EINHARD'S EPISTOLAE AND HIS VITA KAROLI" by Newton Chase January 10, 1938
56	267	9	学生のレポートか "The Count" という題で "Merovingian and Carolingian" という章から (by David Potter, JR)
56	267	9	学生のレポート ローマの "Possessio" とゲルマンの "Gewere" の違い
56	267	9	学生のレポートか
56	267	9	学生の論文 "RELATION OF SAINT BONIFACE AND THE FRANKISH CHURCH" by Marion M. Horn

Box	folder	reel	説明(備考)
56	268	10	学生の論文 "WAS NORMANDY A GRAND FIEF OF THE CROWN IN 911" by Warren Q. Quid
56	269	10	学生の論文 "PHILIP AUGUSTUS VS. JOHN OF ENGLAND : The Litigation Preceding the Sentence of the French Court in 1202" by Frank O. Spinney
56	269	10	学生のレポート (John Toop "Fealty & Homage" という題の冊子)
56	269	10	学生の論文 "THE PEOPLE VERSUS HENRY THE LION" by Merton M. Horn
56	270	10	学生の論文 "SHINTOISM, ITS ORIGIN, DEVELOPMENT AND INTERPRETATION" by Llewellyn C. Fletcher
56	271	10	学生の論文 "ANCIENT CHINA AS AN AGRICULTURAL COMMUNITY, A CIVILIZED SOCIETY AND ITS ECONOMIC FOUNDATION" by W.E. Lawrence June, 1916.
56	272	10	論文 "JAPANESE LAW" 滝川政次郎 (英文タイプ)
56	272	10	論文 "THE ROSSIAN TRADE in KIAKHTA" (英文タイプ)、文末に "Parl Papers, 1821, vi. 362-364"
56	272	10	論文 "THE ORIGIN AND SIGNIFICANCE OF FEUDALISM" by Carl Stephenson (コーネル大学) (英文タイプ)
57	273	10	草稿 日中関係 (タイプ原稿 (1915年) と手稿原稿)
57	274	10	草稿 "The Treaty of Portsmouth" (タイプ英文)
57	275	10	翻訳草稿 古代日本の宗教史料の英訳 (タイプ英文)
57	276	10	翻訳草稿 日本の社会宗教史料 (含む住吉物語) *表紙に鉛筆で「未完」
57	277	10	翻訳草稿 十七条憲法 (タイプ英文)
57	278~9	10	翻訳草稿 8~11世紀の日本荘園史料 (タイプ英文)
57	280	10	翻訳草稿 楠木正成に関する文章 (タイプ英文)
57	281	10	翻訳草稿 勝海舟と西郷隆盛 (タイプ英文)
57	282	10	翻訳草稿 狂言「附子」 (タイプ英文)
57	283	10	翻訳草稿 明治天皇の五カ条の御誓文 (タイプ英文)
57	284	10	翻訳草稿 中世の禅僧の法語 (タイプ英文)
57	285	10	翻訳草稿 王政復古の号令など1868年に出された勅語 (タイプ英文)
57	286	10	翻訳草稿 武士の登場と鎌倉時代 (タイプ英文)
57	287	10	翻訳草稿 岡田式正坐法 (タイプ英文)
58	288~292		YAJコレクション目録 1934~35年 但し、フォルダ288は1934年4月3日付大久保利武書簡以下関連書簡計12点及び関連書類
58	293		地図
58	294		西洋史関係ノート
58	295		絵葉書
59			巻物3点 (大井文書写、朝河正純への感謝状、「農家年中行事繪巻 狩野玉燕筆」・冊子類3点、フォルダ(図の切り抜きなど19点メモ1点)
60	296		イエール大学日本人卒業生同窓会名簿 (1870~1922年)